

日本万国博覧会までの軌跡—EXPO'70開催50周年の回顧—

東洋大学アジア文化研究所蔵／東洋大学井上円了記念博物館

I 章 日本における博覧会の創始

1-1 大博覧会略絵図	木版	出版社不明	1873年	東洋大学附属図書館蔵
日本における本格的な博覧会の創始は内国勲業博覧会（1877年～）と言われるが、それに先立ち明治初期に「博覧会」の名称を冠した催物が開催されていた。1871年に京都の西本願寺で初の博覧会が開催されると、翌1872年に民間の京都博覧会社が設立され、西本願寺などを会場に第1回京都博覧会が開催され、1873年には御所を中心に京都御苑を会場に第2回京都博覧会が開催された。展示の略絵図はこの第2回京都博覧会のもの。禽獣会と称した動物の見世物や料理店の出店が描かれ、博覧会が当初より娯楽・観光の要素を有していたことが見て取れる。				
1-2 懐中東京案内（1編・2編）	和綴本	福田栄造編、同盟社出版（発行）	1877年（版權免許）	個人蔵
1877年に東京・上野公園を中心とした会場において催された第1回内国勲業博覧会は、ヨーロッパを訪問した際に万国博覧会に圧倒された明治新政府の貴顕たちにとって宿願のイベントであった。その名称に示されるように国内の産業・工業・美術工芸の育成を主眼としていたが、展示会場は先行する京都における諸博覧会のように既存施設ではなく、ヨーロッパの万国博覧会を模して、正門ほか様々な陳列館を設けている。一方で民衆にとっては娯楽・観光のイベントとして認識され、展示品のように袖珍本（今でいうところのポケット版）で博覧会場の略図を掲載した東京観光案内が刊行されていた。				
1-3 History of the Empire of Japan / compiled and translated for the Imperial Japanese Commission of the World's Columbian Exposition	洋装本	大日本図書株式会社	1893年10月6日発行	東洋大学アジア文化研究所蔵
国内における内国勲業博覧会の発展と並行して、国威発揚と日本の宣伝のために政府首脳部は海外の万国博覧会における出展に力を注いでいた。本書は1893年のシカゴ万国博覧会において日本を宣伝するために製作・出版された浩瀚なる本書は、数多くの写真とカラー図版を盛り込んだ豪華なものであり、日本館の出展とともに海外に日本の存在を知らしめるものであった。				
1-4 世界大博覧会 THE PARIS UNIVERSAL EXPOSITION, 1900.（太陽 第7巻第1号付録）	一紙、印刷	博文館発行	1901年1月5日発行	東洋大学アジア文化研究所蔵
東京・上野公園を会場とする内国勲業博覧会は、第1回（1877年）、第2回（1881年）、第3回（1890年）と回を重ねるごとに、経験を踏まえて、国内外にアピールする博覧会として整備されてきた。これと並行して、文明開化の恩恵を受けて広く海外に関心を抱きだした民衆も、この頃に刊行された「『太陽』（博文館）をはじめとする雑誌・新聞などマスメディアを通して欧米で開催される万国博覧会にも強い関心・興味を抱くようになりだした。展示品は『太陽』の付録として付けられた欧米の博覧会のグラフ写真である。				
1-5 Histoire de l'art du Japon	洋装本	巴里万国博覧会臨時事務局編	1900年発行	東洋大学附属図書館蔵
19世紀最後の年である1900年にパリで開催された万国博覧会（第5回）は水城宮と電気宮に代表される照明の鮮やかさで一世を風靡した万国博覧会であったが、日本は法隆寺金堂を模した日本館を設け、本書のような日本の伝統美術を紹介する、数多くの写真図版を盛り込んだ豪華な書物を製作・発行した。この頃には新政府は国家運営に大いに自信を深め、徒に西洋を模倣するばかりではなく、伝統文化を発信しようという気概を示すものとして興味深い。				
1-6 上野公園第三回内国勲業博覧会	多色木版、三枚続	楊斎延一画	1890年3月出版	東洋大学附属図書館蔵
1-7 第三回博覧会開場之図	多色木版、三枚続	東州勝月画、猶葉周平版	1890年3月	個人蔵
1890年に上野で開催された第3回内国勲業博覧会は東京開催最後のものであり、こののち会場は関西に移ることとなる。3回目ともなると博覧会の運営も整然・豪華なものとなり、煌びやかな御用馬車に便乗されて明治天皇・昭憲皇太后の御来場の様子は様々な絵師によって錦絵に描かれ、国内の隅々にその御威光を知らしめた。				
1-8 第三回内国勲業博覧会全景	銅版	真壁恭藏画、城倉才七郎版	1890年	個人蔵
内国勲業博覧会はその運営だけでなく、様々なマスメディアを通じて宣伝された。1890年の第3回内国勲業博覧会においては、多色刷りの錦絵と並んで真壁恭藏の描く会場鳥観図を銅版で一色刷りにした。西洋の技法を範としたものであると推測されるが、立体性を重んじ、尺度・角度を緻密に計算された本鳥観図は、国内イベントに関して製作された鳥観図としては日本では草分け的存在として極めて貴重である。				
1-9 第5回パリ万国博覧会（「世界大博覧会」『太陽』第7巻第1号付録）	パネル（原資料：印刷）	博文館発行	1900年撮影	個人蔵
1-10 上野公園博覧会細図（懐中東京案内 1編）	パネル（原資料：木口木版）	福田栄造編、同盟社出版（発行）	1877年（版權免許）	個人蔵

II 章 20世紀以降の日本における博覧会の展開

2-1 第五回内国勲業博覧会明細図	多色木版	延寿画	1903年4月5日発行	東洋大学附属図書館蔵
20世紀を迎えて、1903年に大阪・天王子会場として開催された最後の内国勲業博覧会の多色刷り明細図。技法としては鳥瞰図として見劣りするものの、特筆すべきは“Fifth National Industrial Exposition”と英語が併記されている点である。名称こそ内国勲業博覧会を継承してはいても、工業品保護のバリ条約加盟後の博覧会として、数多くの海外からの出品、14カ国18地域の参加を見て、実態は万国博覧会としての態をなしていた。				
2-2 博覧会・共進会ほか絵葉書アルバム	絵葉書アルバム		明治時代～昭和戦前期	東洋大学附属図書館蔵
20世紀に入り、それまでの錦絵・鳥観図に代わって、写真（白黒もしくは手彩色）による絵葉書が、来場者にとって博覧会の様子を知らせる記念品の主流となった。さらに絵葉書は単なる通信手段だけでなく、収集の対象となって、多くの好事家が魅了されることとなった。多種多様にわたるこれらの絵葉書のなかには今日きわめて高価に取引されるものもある。こうした記念品は、やがて記念切手、メダルなどさまざまな形を変えて、博覧会を盛り上げるものとなっていく。				
2-3 朝鮮博覧会記念写真帖	大和綴	朝鮮総督府（編・発行）	1930年3月20日発行	東洋大学附属図書館蔵
戦前の博覧会は、日本国内にとどまらず、日本が植民地支配をおこなった朝鮮半島・台湾においても開催された。展示品は、1930年に朝鮮総督府によってソウルにおいて開催された朝鮮博覧会の図録。				
2-4 日本万国博覧会回数入場券	小冊子、印刷	社団法人日本万国博覧会協会（発行）	1937年（発行）	個人蔵
日本の宿願であった万国博覧会の名称を冠した「日本万国博覧会」は、1940年に東京・晴海を中心とした会場に開催される予定であった。入念な事前準備がなされ、世界70カ国に招聘状を送り、皇紀2600年記念事業として国家の威信を賭けたものの、第二次世界大戦の勃発、日中戦争の激化などの国際情勢により中止されるに至った。展示品は前売り入場券（回数券）。				
2-5 東京勲業博覧会	多色木版、三枚続	楊斎延一筆	1907年発行	東洋大学附属図書館蔵
日露戦争にともなう国家財政窮乏により、1907年に再び東京・上野で開催される予定であった第6回内国勲業博覧会が中止されると、代わって東京府の主催によって上野において東京勲業博覧会が開催された。展示品は第3回内国勲業博覧会の際と同じく楊斎延一の筆になる錦絵であるが、明治天皇の専用馬車による御来場を描きながら、会場正門ばかりでなく画面左手に外国館と台湾館とがひときわ目立つように配置され、日露戦争後に国際社会における国威発揚の発想が広まり、内国を脱して万国博覧会開催を意識していた当時の世相をよく表している。				

2-6	東京勲業博覧会正門之夜景	石版	田中良三（尚美堂）画・案	〔1907年発行〕	東洋大学附属図書館蔵
1907年に東京・上野で開催された東京勲業博覧会は、1900年のパリ万国博覧会の影響を受けて、会場および不忍池に数多くのイルミネーションが施され、夜更けてからの来場者が多かったことで有名である。展示品はその夜景を描いた銅板版画。					
2-7	名古屋汎太平洋平和博覧会読本	小冊子、印刷	名古屋汎太平洋平和博覧会事務局編・発行	1937年〔発行〕	東洋大学アジア文化研究所蔵
昭和に入ると、それまで東京・京都・大阪を会場とする博覧会が地方においても大小さまざまな博覧会が開催されるようになった。展示品は1937年に名古屋で開催された「名古屋汎太平洋博覧会」の読本（ガイドブック）。日本のみならず環太平洋圏を意識し、様々な外国館を設立して、名古屋発信の万国博覧会を意識していたことがわかる。					
2-8	通運館内部光景（『第五回国勲業博覧会記念写真帖』巻の四）	パネル （原資料：印刷）		1903年撮影	個人蔵

Ⅲ章 日本万国博覧会の開催

3-1	日本万国博覧会関係印刷物（パンフレット、リーフレット、絵はがき）	印刷物一括		1970年	東洋大学アジア文化研究所蔵
日本万国博覧会に関連して会場内外で配布された印刷物。パビリオンで頒布されたパンフレット、リーフレットのほか、宣伝のために作成された絵葉書等もある。					
3-2	EXPO'70 万国手帳	手帳	ダイゴー株式会社編集・発行	1969年〔発行〕	個人蔵
1970年の日本万国博覧会において一世を風靡した仕掛けが、各館に設置された記念スタンプである。当時の来場者とりわけ子供たちにとってスタンプ収集は万博参加への大きな刺激剤となった。展示品は東洋大船員教員の私物。当時小学校低学年であった教員は、親に買ってもらったこの手帖を片手に2泊3日で広い会場をめぐった。					
3-3	Hayat	新聞型冊子、印刷		1970年発行か	個人蔵
1970年の日本万国博覧会（大阪万博）は、海外においても広く紹介された戦後日本にとって1964年の東京オリンピックと並ぶ一大イベントであった。展示品の『Hayat』は、トルコのグラフィ誌（ニュース雑誌）である。見開きフルカラーで、トルコが参加した日本万国博覧会の様子を報じている。					
3-4	LE JAPON ET LE JAPONAIS EXPO'70 日本館 LE PAVILLON DU JAPAN	小冊子、印刷	通商産業省、独立行政法人日本貿易振興機構編集・発行	1970年〔発行〕	個人蔵
3-5	日本万国博覧会政府公式記録	洋装本・布張表紙・上製本、印刷、付函	通商産業省編・発行	1971年3月31日発行	東洋大学アジア文化研究所蔵
3-6	日本万国博覧会 会場配置図（『日本万国博覧会公式記録』付録）	印刷	通商産業省発行	1971年3月31日発行	東洋大学アジア文化研究所蔵
通商産業省『日本万国博覧会政府公式記録』の付録。B1判よりもやや大きい縦73.5センチ、横1メートル4センチの大紙面に、日本万国博覧会の会場配置図が描かれる。裏面には、会場案内図、周辺交通図のほか、日本地図と世界地図が載せられている。					
3-7	日本万国博覧会記念公園（太陽の塔）	パネル	個人蔵撮影	2019年撮影	個人蔵